調査報告

鬼師の世界

——黒地：山本吉兵衛系(1)——

高原　隆

Abstract

The world of ogre-tile makers consists of two parts : one is that of "Kuroji" and the other that of "Shiraji". "Kuroji" designates fired tiles. On the other hand "Shiraji" denotes tiles prepared for firing in a kiln. As a matter of fact, the world of "Kuroji" in Sanshu is divided into three parts. One is the group of the Yamamoto Kichibei line, the second that of the "Onigen" and the "Onisen", and the third that of the remained ogre-tile makers which do not belong to the above two groups.

The reason why the world of "Kuroji" and that of "Shiraji" exist is because both groups have their own guilds independently. That is why we can say two kinds of worlds making ogre-tiles co-exist with each other in Sanshu, Japan. Firstly, I will focus on the world of "Kuroji". However, that of "Kuroji" itself has three parts as I mentioned in the above. The number of ogre-tile makers in the world of "Kuroji" is nineteen. Therefore I will take basically three steps. First, I will describe the group of the Yamamoto Kichibei line. The delineation of the second and third groups will follow respectively in the future. I will show these groups' characteristics, histories, and current situations one by one. As taking a view of the state of each group and making a comparison among them, the whole picture of the world of ogre-tile makers in "Kuroji" will take a shape.

The group of the Yamamoto Kichibei line consists of three groups. The first group can be called the Ishikawa Fukutaro line which has four ogre-tile makers. However, only one ogre-tile maker belongs to the guild of "Kuroji". The second group is the Nagasaka Suekichi line which has three ogre-tile makers. The third is the Kajikawa Hyakutaro line. This group has also three ogre-tile makers. In this article I will delineate the first and second groups. The third one will be written in the next article. The character of the Yamamoto Kichibei line will appear in the process of delineating each ogre-tile maker.

三州の鬼板屋は「黒地」と「白地」を作る二系統の鬼板屋に大別される。「黒地」とは自らの工場に窯を据えて，完成品となる鬼瓦や役瓦などを自らの窯で焼成し，窯から出て焼成された鬼瓦などが，外見上の色が黒いところからその名がある。一方の「白地」は窯に入れて焼成される準備ができた鬼瓦や瓦を指し，生の粘土から職人の手を経て形成され，乾燥中ま

たは乾燥を終えたものを指す。そしてその焼成前の色が白いところから焼成後の「黒地」に対して「白地」と呼ばれている。この章では黒地を生産する三州鬼板屋の現状を，インタビューを通して語る鬼板師たちの声を中心に，今に生きる鬼師の世界として描いてみたい。

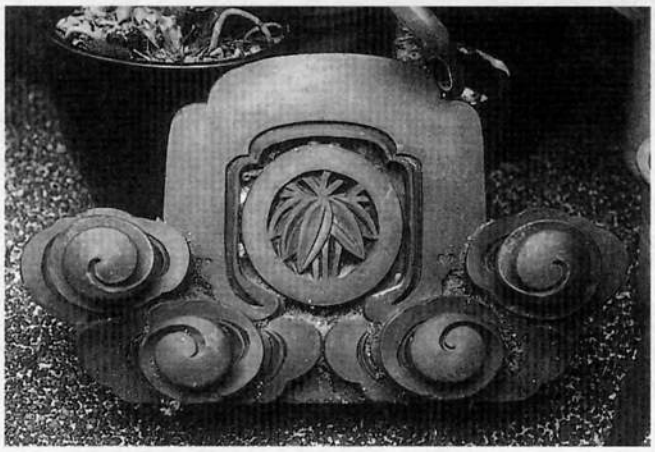
「黒地」と「白地」の鬼板屋はそれぞれ組合を持っており「黒地」が三州鬼瓦製造組合といい，「白地」が三州鬼瓦白地製造組合である。手元にあるのは「優雅な銀色　三州鬼瓦」と銘打った三州鬼瓦製造組合員名簿である。これに基づいて上から順に紹介していくのも一方法ではあるが，少し趣向を変え，各鬼板屋を由来に沿って大きなグループないしは流派として名簿より構成し直し，それぞれを一つの集合と見なすのである。そしてグループごとの現在及び歴史を見ることによって各流派の三州における全体との比較から各グループの鬼板屋の特徴，並びに三州鬼瓦の全体としての特徴が浮き上がってくるはずである。つまりここでは三州鬼瓦—黒地の世界[1]の全体像に迫ってみたい。

三州の黒地の鬼瓦を生産する鬼板屋は伝統的に大きく二つに分けられる。山本吉兵衛を元祖とするグループと，神谷春義の鬼源と岩月仙太郎の鬼仙の二つを伝統上共通の元祖とするグループである。山本吉兵衛に端を発する鬼板屋は黒地では神仲，福井製陶，鬼良，鬼百，鬼亮がそのメンバーである。もう一方のグループである神谷春義・岩月仙太郎を元祖とする鬼板屋は鬼源，鬼長，上鬼栄工業，笹山製鬼所，鬼仙，鬼作である。ところが以上の2グループに属さない鬼板屋が別に8軒あり，これをその他のグループとしたい。三州黒地の鬼板屋はこのように大きくは実質上三つのグループに分けられる。この章ではその第1グループである山本吉兵衛を元祖とする鬼板屋群についてその輪郭を捕えてみたいと思う。

山本吉兵衛は（文政13（1830）—明治37（1904））山本成八の次男で（現山本鬼瓦の祖先）明治の初めのころ，およそ10年近く職人として出稼ぎ（ばんくもん）に出，明治7年のころ高浜で鬼瓦屋を始めたと言われている。(第1図及び第2図参照) 現在高浜市青木町にある山本吉兵衛の碑は明治43年12月建立になっており，15人の弟子の名が刻まれている。それ故に高浜市誌資料(六)（1971）は「現在の高浜の鬼瓦業者はほとんど吉兵衛の弟子の筋目であろうし，近在での一鬼板屋の元祖である」と言っている。しかし2002年における三州一帯の鬼瓦屋の現状はかなりの変化が見られる。

現在，山本吉兵衛グループは元祖としての山本吉兵衛を中心に一つにまとまりはするものの，吉兵衛の弟子であり職人であった人々によって三派に分かれている。第1のグループは職人石川福太郎の流れを汲む石川福太郎系である。その中には黒地の神仲及び白地の三州製鬼，カネコ鬼瓦，岡成製鬼が存在している。第2グループは職人長坂末吉から出ている長坂末吉系である。福井製陶，鬼良，鬼末がここに属している。第3グループが梶川百太郎を祖とする梶川百太郎系である。鬼百と鬼亮が黒地の鬼板屋としてあり，白地組合には参加していないが白地を作っている梶川務もこのグループにはいる。以下これら三つのグループにつ

第1図
山本吉兵衛　肖像画(山本家所蔵)



第2図
舎（やまきち：山本吉兵衛の経営する鬼瓦屋の屋号）で作った鬼瓦

いて詳述することによって山本吉兵衛の伝統を持つ鬼板屋の特徴を探ってみたい。

(1)　石川福太郎系
―㈱神仲（及び白地として三州製鬼，カネコ鬼瓦，岡成製鬼）

石川福太郎の系列は現在4社ある。その全てが白地の組合である三州鬼瓦白地製造組合に所属しており，そのうちの1社である神仲が白地と共に黒地の組合・三州鬼瓦製造組合にも加入している。本家本元の石川福太郎の興した鬼福は今は鬼板屋として存在していない。(第3図参照)

㈱神仲

このグループ唯一の黒地の鬼板屋が神仲である。初代の神谷仲次郎の姉が鬼福へ嫁いだこ

第3図
石川福太郎　肖像画（石川家所蔵）

とにより，石川家と神谷家は親戚となっている。その縁により初代神谷仲次郎はなんと小学校4年生で姉のいる鬼福へ弟子入りし，鬼瓦の技術を修行し始めたことが，神谷家が鬼板屋「神仲」になる始まりとなった。もう一つ時を遡ると次のような流れになる。三州鬼瓦の元祖といわれる山本吉兵衛のところで修業していた職人の石川福太郎が独立して鬼福という鬼瓦屋を始め，そこへ神谷仲次郎の姉が嫁いだ訳である。その姉の嫁いだ鬼福へ弟の仲次郎が修業に行き，後に独立して「鬼仲」という鬼瓦屋を創業したのは，大正6年または8年とかのことで，その創業の年ははっきりしていない。(第4図及び第5図参照)

現在の屋号である「神仲」はもともとは「神仲」ではなく，他の鬼板屋の伝統と同じように頭に「鬼」が付いた「鬼仲」という鬼板屋だった。それがある出来事によって現在の「神仲」に変わったのである。二代目の神谷伸達は次のようにその逸話を語っている。

> 親父は仲次郎といいます。仲次郎ですからその「仲」をとって神さんの「神」に仲をやって「神仲」，そういうことに。それで，これはこれでエピソードがございましてね。あのー，申し上げますとこれはつまらん事ですが，親父がある旅行の時に東海道線に乗って片方は近くに乗る，親父の方は戸から遠くに離れて乗る。そういうことでお互い乗り合ったところが，「鬼仲さん，こっちだよーっ」て言って大きな声でその同業者が呼んだと。で，そうすると，そこに乗っておったそのお客さんたちは「鬼仲」とはどういう人だと，「鬼」の付くような人はどういう人だということで，一斉にこっちを向いたと，こ

第4図
神谷仲次郎

うですね。で，まあ，体中から汗が出てきて，それでまあ，こやー，普通まあ一般的には鬼板屋は，えー，鬼長とか鬼源とかいう鬼を頭に着けて屋号にしておって，私のところも「鬼仲」という屋号でおったんですが。そういうようなことがあって，とてもそのー，っていうことで「神仲」にしようということで，神仲と。

神仲は大正6年（または8年）に始まり現社長の三代目神谷晋に至っているが，鬼板屋として大きく一度中断している。それが他の鬼板屋も同様の状態となった太平洋戦争である。神谷伸達は次のように語り，戦後になって二代目伸達が神仲に加わり，新しい時代が始まった様子が分かるのである。

第5図
鯉付き巴蓋（神谷仲次郎作）

たまたま操業して間がないころ関東大震災（1923年）があって，まあ，その後が大変で，一時地震景気といったような時があって，昭和（1926年）に入る。昭和に入って先ほど申し上げたように，昭和恐慌というそういう時代を経て，そして支那事変あるいは太平洋戦争へ突っ込んで行ったんですが。で，昭和18年頃ですかね，要するに，あのー，挙国一致体制ということでそんなそのー，鬼瓦や瓦つくっとっちゃいかんと言うことで全廃させられました。ですからそういうことで鬼瓦を中止しました。

ではその鬼瓦空白期間何をしていたかといえば，なんと八幡製鉄所の炉の煉瓦を鬼瓦の代わりに作っていたという。この時に出てくるのが「三河粘土文化圏」[2)]的な動きであり，すぐに神仲ではこの事態に対応し，瀬戸から煉瓦会社と契約を結び工場を貸すことにより鬼瓦から煉瓦へと転換を計っている。粘土文化の交流の良い事例を示している。それと共に神仲のこの動きは社会変化に対するその対応の早さをも物語っている。ところが戦後になるとこの煉瓦工場との賃貸契約があり，3年ほど鬼瓦製作再開を待つことになった。そしてこの昭和18年から昭和23年に渡る鬼瓦の空白期間が次の世代の始まりをも意味することになる。

第2次神仲が始まったのが昭和23年であり，この時事実上，初代神谷仲次郎と二代目伸達の二人で再起業を決定し，さらに一番弟子といわれる杉浦民一を加えて開業にこぎ着けている。伸達はこの時に起こった伝統的な技術伝承に関わるエピソードをいくつか語っている。個人的な出来事であるが，同時に三州鬼瓦の技術伝承の型をも示している。

いまだに記憶ははっきりしておるんですが，要するにあの，親父は「鬼の技術は見て盗んで覚えた。」そういうことをまあ常に言ってましたんで，まああの，たまたま一番弟子の杉浦民一さんという人が鬼を作っていましたんで，まあそれを見ながら今日の技術を覚えた。そういうことなんですが，いまだにその親父がこうやって鬼は作るんだっていう手本を見せてくれた記憶はない。

そういうことの中でまた，「おまえ，おれは優しいだ」と。「誰々さんのところへ行くと今日作ったものが明日の朝行くと手でげんこつでクシャッと潰してある」と。

まだそこらはいい方。下手にすればタタキっていいましてねえ。鬼をこう，えー，叩き板っていうんですが，それで背中をピッとたたかれると。そういうようなことの中で，まあ要するに私以前の人たちはそういう厳しい状況の中で育ってきた。

で私はそんなことは一回もなかったんですが，そういうことでまあ鬼を作り出したと。

伸達の場合，5人兄弟の中の一人息子であり，子供のころから親の働く姿を見て育ったが，実際に鬼瓦を始めることになるのは昭和23年，22，3歳の頃であった。次の逸話も三州鬼瓦の技術伝承の型を伝えると共に，鬼板屋それ自体の継承が絡み合って，いかに伝統技術の継承が理想と現実に挟まれて難しいものかを物語っている。いつ頃鬼瓦を継ぐ決心をしたのかという私の質問に答えて出てきた話である。

これはね，戦後ですね。戦後，要するに親父が鬼をやるぞという，先ほど申し上げたよ

うに20年に敗戦になって2，3年建陶社というところでそういうまあ別のものを作っておったんで，それが期限が来て今から鬼板を作らないかということで，その時に決心したということですねえ。

ほで，その決心をするのにねえ，親父，その，とにかく親父は教えてくれんもんでねえ。だから私を渡り職人に出せと。2，3年。2年なら2年，3年なら3年，きちっと期限を切って。で，俺日本中へら1本で技術を覚えてくる。それだで，しばらくは外に出してくれ。この話を随分やったんですがね，親父はどうしてもうんと言わない。最後までいかんと。おまえ一人だけだでいかんと。

一人だけだで出て覚えて来なだめじゃないか，言うことをまあどうですかね，しつこいほど言っても許可がでん。出んもんだで，まあちょっとその当時は出してくれなきゃってんで，ちょっと家を出てやな，そいでちょっと離れた温泉で1週間か10日ごろついた事もありましたけどね。

あの，それはね，要するにいまだに長野県だとか群馬県だとか，滋賀県とかそちらの方で要するにあの当時そういう職人を「ばんくもん」と呼んでおったんですね。ばんくもんという渡り職人は大体ね，要するに若い時に行くんでね，行った先，行った先で鬼を作って次から次と渡ってくんですが，要するにその，女房を作っちゃうんですね。で，時によってはその瓦屋さんの親方の娘さんに惚れちゃうとか。

そうなると体を取られちゃうと，向こうへ。一人だけの倅をまあ，よその瓦屋に取られてどうなるというね。そういう心配。当時全然そんなこと思わなかったんですがね。思わなかったんですが，20年，25年過ぎて，何で親父は俺を職人に出さんかったんかなということをね，えー，思うといろいろそういうことがあって，一人だけの倅を他県の瓦屋の娘さんに取られちゃうというような事が心配だったなあと。

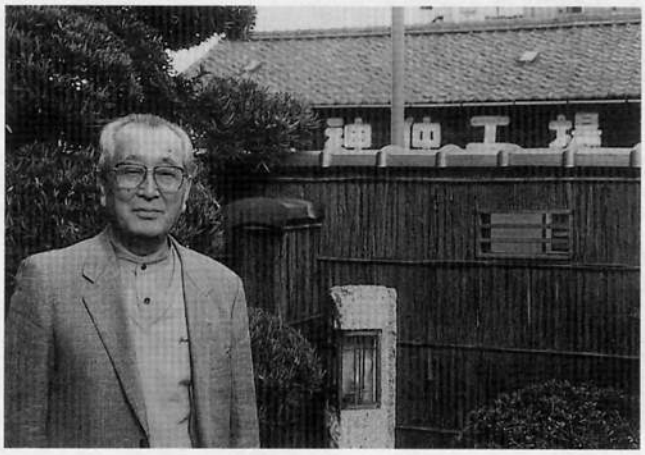
で，お袋にそんな話をしたら，そりゃそうだねえ，と。肯定されたような，まあそういう事も有りましてね。ですから，えー，まだまだ近代的な産業といいますか，そういう事になってくるにはまだ日が浅いですね。まあ，40年ぐらい，40年か45年ぐらいでしょうな。それ以前はほんとにまあ手造り職人で，はい。そんなような当時のまあエピソードみたいなものを含んでね，まあ，難儀して覚えて来たというのが実情ですな。

最後のコメントにあるように神谷伸達は手造り職人の世界と戦後暫くして始まったプレス導

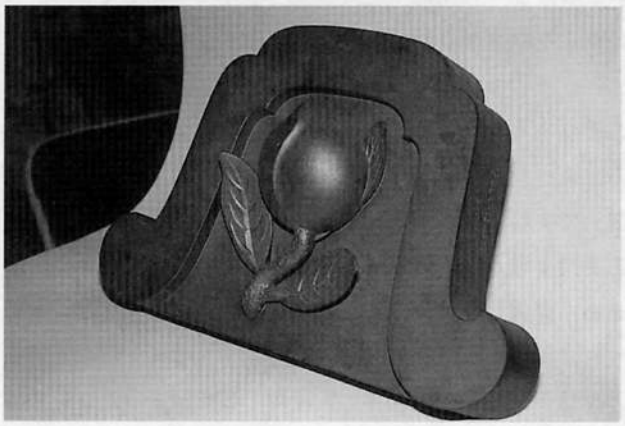
入による鬼瓦製作の機械化という近代化の時代を経て来ている。(第6図及び第7図参照) 戦後の再出発の時点では手造りの鬼瓦を製作する鬼板屋であった神仲は，その後急速に近代化の波に乗りプレスへと移っていった。そのプレス化への道を選択したのが他ならぬ伸達であった。伸達は次のように述べている。

「プレスはね，実は正直申し上げると私のとこが一番早かったんです。はい。機械化するっちゅうのは。」一番早かったということは伸達はプレスの開発に大なり小なり関わっており，事実碧南の小笠原鉄工所と共同で行った鬼瓦のプレス化について次のように語っている。

> 実はその前に金（型）で，その鬼を作ろうということを試みた人があるんです。これは戦前ではあった。ところが，この機械でニュッと全部圧縮して形にしようということが何としてもできなかったですね。ということはどこに原因があったかというと，この粘土の中の空気が圧縮され膨らんじゃうんですね。で，そこで，要するにあの，これは碧



第6図
神谷伸達（自宅と旧神仲工場）



第7図
据え鬼（復元された鬼瓦・名古屋城・角矢倉、神谷伸達作）

南に小笠原鉄工所というのがあって，今はやってませんよ。やってませんが，当時これが真空ドレン機といいましてね。要するに粘土の中の埋まっとる空気を抜いて脱気して，そしてあの，粘土を板にすると。それでやるとピチッと入っちゃうね。それが当時わからんで，小笠原という人と，「おい神谷さん，鬼をこれでやってみよう」といったような話で，やって，意外に良かったですね。ですから今の瓦屋さんも一切合切鬼板屋も全部プレス物は真空脱気ですね。要するに空気を抜くと。

以下，私と伸達の会話がプレスを中心に続く。プレスの導入と共に神仲は急速に販路を拡大した。もともと関東向けの鬼瓦を作っていたこともあり，関東の以北へとマーケットを拡張し，同時に工場におけるプレス化に加速が加わった様がうかがえる。

高原：そのプレスに移ろうとした動機は何ですか。

伸達：こりゃあやっぱしねえ，時の需要に追い付けなかったんですわね。

高原：それほど出たわけですか。

伸達：出たです。特にまあ，これもこんな事言っちゃあ何ですが，その当時先ほど言ったように。

高原：それは何年ぐらいですか。

伸達：28，9年の頃。

高原：昭和ですか。

伸達：はい。でしょうかねえ。その真空ドレン機を試作したり何かし出すのはその頃だと思うんですよ。

高原：それから何年かけて完成したんですか。

伸達：2，3年はかかったでしょうな。で，30年半ばちょっと前，ぐらいから実用化しておったんじゃないかな。これはちょっと定かじゃないです。で，うーん，要するにその三州でもその鬼の技術者がだんだん，若い人が，やる人が少なくなってきたと同時に，他県組も同じ事ですね。そうかといって鬼の需要は減らないと。

高原：ははーっ，家は建つわけですね。

伸達：そうなんです。それでまあ，私ども，まあ私どもというより私一番初めに東北の方に出たんです。仙台，茨城，茨城から向こうの仙台の方にね。向こうに瓦屋さんが5，6軒あって，どうしても，どうしても鬼がほしいと言うことで随分仙台方面に売りました。で，そういう需要を賄いきれん。地方の方はどういうことかと言いますと，地元が10円だと，東北の方は20円で売れるんです。

高原：出荷の時点で？

伸達：そうそう，そうそう。倍で売れるんで。

高原：そりゃ，笑いが止まらんというか。

伸達：そうそう。で，だから，地元の長い間のお得意さんにこう，そうかと言って多少出荷しなきゃいかん。東北ばっか出しとったら，あるいはそのー，石州の方ばっか出しとっちゃいかんで，地元の方にも出すんですが，地元の人は「何で神谷さん，鬼持って来ん」と。こういうことでしょっちゅう叱られとる。そりゃ，あんた，東北持ってっちゃうもんだ。

ほいで，こりゃいかんと言うことでまあ，金型化が盛んになったと言うことでしょうな。そいで，それが，ここ7，8年ぐらい前に飽和点に達しちゃって，それであの，今も言ったように瓦の形態も変わってくる。

以上のように神仲はもともとは伝統的な手造りの鬼板屋であったが，二代目の伸達によってプレス化へと転身し，社会の需要に合わせて鬼板屋の近代化の先駆け，さらには，近代化のモデル的な工場へと変貌していったのである。そして現在，プレス物と手造りの比率はプレス9割強に対し，手造りは残り1割未満といった情況になっている。

神仲はインタビューを行った1999年9月22日時点ですでに伸達から三代目社長の晋へとさらに世代が交代しており，正直言って，運良く二代目伸達と三代目晋の両方から快くインタビューに応じてもらい，かなり詳しく神仲及び三州鬼瓦の世界について語ってもらうことができたケースである。フィールドワークの場合，どうしても運不運があり，その当事者と2代に渡って会える場合は幸運といえよう。

さて三代目晋の場合であるが，昭和29年生まれで，愛知大学卒業後すぐに跡継ぎとして神仲に入り，屋根工事の施工，そして製造部へ移り，現在経営者として活躍している。伸達の話からも明らかなように市場における急速な需要の拡大があり，鬼板屋の近代化（機械化）が進んでいったわけであるが，実際にいかに変貌していったかについては神谷晋から知ることができる。神仲は時代の変化に速やかに対処する気風があり，神仲の流れが同時に三州鬼瓦の流れを表しているところが多分にある。

自分の小学校の頃というのは，まあ達磨窯の焼成で，純粋な手造りあるいはまあ石膏の型置き生産が鬼屋の一般的な姿だったんですね。その頃というのは我々鬼屋は当然その達磨窯でその焼成した燻しの製品として，問屋さんに納めていたと。また，貨車便でね，鉄道で送るケースが多かったなあと思うんですけど。（第8図参照）

片や瓦屋さんというのも当然あったんですよね。で，問屋さんというのは鬼は鬼屋さんから買う，瓦は瓦屋さんから買うというそういう形態，今とちょっと違うんですけど，そういう形態でした。

第8図
焼成中の達磨窯とその黒煙
(現在ではこの光景はまちから消えてしまった)

瓦の焼き方の変遷から時代区分すると，伝統的な燻し瓦の全盛時代が過ぎて，次が塩焼き瓦の時代，そして陶器瓦の時代へと移って来たわけであるが，この陶器瓦は現在でも主流で，神谷晋によると高校の頃から20歳過ぎたぐらいに陶器瓦が盛んになって来たという。そして大量に瓦を生産するシステムとして登場するのがトンネル窯である。この新しいシステムに対応して出てくるのが鬼瓦用のプレスである。

陶器瓦というのはトンネル窯で焼成をするのが主だった。今，家では単窯でやっていますけど。単独炉でね。あの連続窯のトンネル窯で焼成をするんですけど，それが全盛になって来た。でそうすると，自ずと鬼瓦も今まで通りでいると，そうすると我々鬼屋っていうのは焼く前の素地の段階の物を出荷すると。素地出荷と。だから数も格段に増える。出荷個数も格段に増えると。そうすると手造りでは追い付かない。で，どうしたかというとプレス成形。

要するに金型の良く出る種類の物から金型を揃えて鋳物の金型を揃えて，それでプレス成形することによって，もう10倍も20倍もたくさんできるようになるわけですよね。手造り施工に比べてね。で素地工場というのが今の神仲で言うこの工場なんです。鬼に関して言うと素地で出荷するそういった時代が来たわけですよね。それが今でも続いています。いや今はもう逆にその鬼屋が製品化しちゃって出すという時代になっちゃたんですけど，その一つ前は鬼屋が素地として素地の段階で瓦屋さんに買っていただくと。それがもう20年から25年続いたんですよ。

神谷晋はこういった変化を鬼の三段階の変化として捕え，「黒の鬼の時代」，「素地の鬼の時代」，「製品化した鬼の時代」と言っている。最後の製品化とは陶器の製品を指す。いわばこ

の三つの流れが手造りの鬼瓦が白地としてプレス化され，さらにプレスの陶器の鬼瓦へと変貌していった様を示している。具体的には神仲の現場の声を聞くことにしよう。

神仲も窯を入れて，例えばいろんな種類の，いろんな色種の物を焼くようになるんですわ。銀黒だとかシルバーの色だとか，オレンジ，ワイン，ブラック。もう本当にうちもねえ，20種類，20色ぐらいの鬼の在庫を持った。まあ今は限定して来ましたけど。だから生産管理から製造管理から在庫負担なんて言ったら大変なもんで。それがある程度，自社で素地も作り，プラス余力があって焼成までやれるところでしか，やっぱりやれないですよね。

ところが神仲はさらに変貌を続けており，現在では鬼瓦生産が従来の半分以下になり平板の道具物を素地から作り，焼き上げて，平板メーカー[3)]に特殊瓦として納めるようになっている。神谷晋の次の言葉が神仲の経営方針をよく示している。「うちも何というのか，付加価値が多少低くってもやっぱり出る物を作っていかにゃー，という方向でまあ流れに乗り遅れずにと言う方向でね。」

このように神仲は手造りの鬼瓦からプレスの鬼瓦へと変化し，さらに鬼瓦の生産を大幅に縮小させ，伝統的な鬼瓦の形態を持たない平板瓦用の特殊瓦を生産するような体制になっている。ところが神谷晋は次なる変貌をさらに進行させており，それが干支やガーデニングといった新しいマーケット開拓である。(第9図参照)

鬼の技術を生かした何かないかなあと。だから「鬼の技術」プラス「今の鬼」ですとか，瓦の素材を使った物をね。で，一つはこの前の干支があればちょっとどうだろうと。あ

第9図
神谷晋（神仲の製造工場にて焼成完了後の窯出し作業中）

るいはガーデニングのね，瓦素材のあのまあプランターというのか，まあ植木鉢のような物はどうだろうかということでまだ手探りの段階でね。できるだけ商品開発をね，売れる物をまあ何ちゅうか手がけていきたいなあと，思っているのが現状です。

神仲はもともと黒地の伝統的な鬼板屋であったが，現在は大きく変貌を遂げ，機械化による平板の特殊瓦の生産工場へと実態を移している。こうした変化は何と神仲で働く従業員の領域にまで及び，近代化とはいったい何なのかを如実に体現している。神谷晋によると現在従業員が24，5人で，そのうち3分の1がブラジル系なのだという。

鬼屋というより瓦屋さんの方で我々よりも早い時期にね雇い入れされて見えて，鬼屋も瓦屋さんと同じようにそれじゃちょっとね，入れてみようかと言うことだったんですよ。もう一つ先を言うとね，こちらにあの自動車部品を作っている工場がやはり，高浜，刈谷，碧南，ありますよね。トヨタ関連の物をね。そういったところはすでに我々よりも何年か前に，もうブラジル人を雇っているんですよ。

このように伝統的なイメージの鬼瓦屋からは想像できない鬼板屋，それが現在の神仲であり，進取の気風を二代目の伸達から確実に受け継いでいる。

(2) 長坂末吉系―福井製陶，鬼良，鬼末

福井製陶

長坂末吉の系列は3社であり，直系は鬼末である。しかし直接インタビューをした当時鬼末は白地組合に属していたので，ここではまず福井製陶の方を先に取り上げる。ただ長坂末吉の直系が白地というのは他の系列と比べても変わっている。ところで福井製陶は純粋に黒の鬼板屋ではなく，同時に白地組合にも所属している鬼板屋である。現在は二代目福井謙一が工場を経営している。初代は福井眞二でもともとは百姓をやっていたという。普通の百姓だったと謙一は言うが，初代と名が付いているように実は百姓の合間を見て鬼瓦を作っていたのである。つまり百姓と職人が半々の生業を成していたわけで，古い形の鬼板師としての職人姿を残していたように思われる。眞二は職人として長坂末吉の経営する「鬼末」へ働きに行っていたわけで，系統的には長坂末吉系に入る。ところが他にも当時，鬼板屋としての屋号を挙げていなかった「福光」という鬼板の白地屋でも職人として仕事をしており，鬼板師としての伝統の流れが初代の段階から複線化しているのがわかる。(第10図及び第11図参照) 家に帰ってからも仕事をしていた様子を二代目の謙一は次のように語っている。「うちでもちょこっとやりかけたこともあるもんだね。仕事場というような仕事場じゃないけど，ま

第10図
福井眞二

第11図
獅子巴蓋（福井眞二作）

あ，百姓の納屋の横ぐらいでね。ごそごそごそごそと作っとったこともあるもんだで。」

実は，初代眞二は鬼瓦の職人としてずっと通したわけではなく，普通の鬼瓦の白地屋から土管屋といった家業まで営んできている。全て土物であるところにこれらの職種間に共通する物があるが，実際に現在の福井製陶となり鬼板を作り始めたのは昭和46年（1971）という。創業者は初代ではなく二代目の福井謙一であった。福井製陶になる前までは土管屋であった。出発した段階では福井製陶は白地屋であり，昭和61年頃に窯を導入し，黒地の組合に加入している。つまり福井製陶は鬼板屋としては比較的新しい。しかも他業種としての土管屋から鬼板の白地屋に変わったいわゆる新興の白地屋グループに属する。ところが現在の出荷に占める機械（プレス）と手造りの比率は6対4となっており，全くの門外漢から鬼瓦の世界へ参入して来たわけではないことがわかる。この4割の黒地の部分が通常の白地屋にない特徴で，福井製陶をして初代眞二に遡る縦糸があることを示唆していると言えよう。この伝統を形作る縦糸の目を少し追ってみたい。そうすることによりいかにして伝統が生まれてくるかの契機を知ることができる。

福井製陶創業者である謙一には父眞二の鬼を作っている姿が今もはっきり刷り込まれており，いつ頃父親が鬼板師であることに気が付いたか，という問いに次のように答えている。

小学校3年か4年生の頃じゃないかなあ。気がついたんわね。鬼師っていうまではいかん。なかなか根気のいる仕事だなあと思ったなあ。ま，手伝うっていうようなことはせやせんけど，親父が作っとる土を持ってきて，ごたごたしたことはあるわな。

実際に直接鬼瓦造りに関わるようになるのは謙一が18歳の時（1954年）である。中学校を卒業して暫く家業の瓦造りを手伝っていたところ，父親から小僧として鬼板を習いに行くように言われる。「親父が，ま，土仕事やるなら鬼板ならっときゃー。鬼板ならっときゃ，何でもやれるって言うことでね。まあ，その頃，まだ知らんけど，まあ，行ってみるかってな調子で行っただけんどね。」謙一が小僧として入った鬼板屋は屋号を上げていないが当時「福みっつぁん」と呼んでいた，また父親の眞二が白地を納めていた山本福光[4]という鬼瓦屋であった。謙一は通いながら「福光」で3年と少しの期間小僧として働き，年を明けて職人となった。直接付いて習った事実上の師匠は石川類似であったという。当時の様子を謙一は次のように言っている。「職人さんは5人おったねえ。丁寧に，今よりも仕事が丁寧にやりよったもんだね。数できんもんね。手造り，石膏で，石膏から起こして。機械みたいなもんありゃせんもんね。何でも作っとったよ。全て作っとった。」そしていかに小僧として覚えていったかを謙一は回顧する。

見て覚えて，隣に教えてくれる人がおったもんだね。ほんだもんだで，まあ，教えてもらっただね。一つ仕上げると，見てもらって，いかんところがあったら，ここがいかんでー，こうせよとか。じっくり手間かけて，しっかり基礎を仕込まれてきた。

具体的に話してほしいという要望に次のように答えている。

最初はね，一番簡単な，「めがね」って言うやつだけんね。「めがね」って言う鬼だけんね。

このめがねは別名「すはま」とも呼ばれていたと言い，次のように更に継いでいる。

俺はその鬼から習ったような気がするけんね。すはまの次は「ごまた」……「五寸またぎ」ってやつだけん。ほれから順番にだんだんと大きくなってくんだけど。親方が，今度これやってみよって。石膏型持って来て，これやってみよってやるだけんね。石膏抜いてへらをかけてね。ほいで教えてもらう人に仕上げたやつを見てもらって，ほいで，許しがでやー，ほいでいいだ。ここがいかんなら，ここがいかんで直すだけで。

師匠の石川類似からは次のように言われたという。「まあ，基礎ができればね，今度大きい鬼

になってきても，あのー，一緒だで，最初肝心だで，しっかり覚えないかんって，……へらの入れ方ね。」謙一の師匠に対する言葉が「最初から厳しかったね」である。何でも作れる腕のいい職人さんであったと言い，原型も作っていたという。そして小僧から職人になってからのことを次のように物語っている。

> まあ，やっぱり，年明けてからの勉強ですよ。全部が全部作れる，作ってから年が明けるじゃないもんね。ある程度のところまで行って，後は，まあ，そういうへらの使いとかなんか教えてもらやー，後はまあ，自分でねー。年明けてから自分で勘考して，作る，作るだわね。

年が明けて[5]職人になって仕事場では次のような状況が展開する。

> なかなか3年半やそこらじゃーね，まだ他にも職人さんがおるし，あー，作らせてもらえんもんね。職人さんでも待たないかんもんね。ま，ある程度覚え，覚えてから，順番にね。あのー，作らしてもらえるようになるだけんどね。

そして年を明けると，それまで小僧の時は当時，小遣いとして月7,000円もらっていた者が，1個いくらの出来高制に移るのだという。つまり，腕のいい職人と腕の良くない職人とではかなりの差が付くことになる。謙一は良い腕の職人の定義を簡潔にこう言う。「速くて綺麗。」実に明解である。

このように18歳で小僧として福光で働き修行したのであるが，年が明けて家が土管屋を始めると人手が足りないことを理由に福光をやめて，鬼瓦から離れ，土管屋になり，福井製陶へと移るまでの約7年間を過ごすことになったのである。以上のように謙一は初代眞二の影響を受けながら現在の福井製陶へと辿り着いていることがわかる。ただ直接，父親の眞二から鬼板の作り方を習ったことはないとのことで，今の福井製陶は福光流であって，長坂末吉からは少しずれることになる。最も初代眞二も長坂末吉の鬼末から福光へと職人として移っているので，内部における技術的な流れが大幅に変わったとは言えない。変化はすでに初代の眞二の時に起きていたのである。

創業が昭和46年で手造りの白地屋として始め，昭和48年にプレスを導入している。最初は一人で始めたとのことであるが，昭和48年（1973）にはプレスを入れて員数を増やし，現在6人が工場で働いている。そのうち従業員が4人とのことである。謙一は今も手造りの鬼瓦を作っており，娘婿の春日英紀と一緒に手造り部門を手がけている。このように次の代へ（三代目）の手造りの受け渡しを成功させ，次のように言っている。「石膏型から教えて，今，まあ，手でやれるようになったけんね。7分ぐらいはまあ，ちょっと移りかけて来たかな。」福

井製陶では白地が6で，黒地が4の割合なのであるが，石膏で仕上げる鬼とプレスによる機械で作る鬼の出来上りの違いについて訊ねてみた。「全然違う。石膏型で，あの，プレスがあるもん，石膏型で作っとったら，まあ，全然違う。口じゃ言えんね。」そして手造りの鬼瓦を作るときの姿勢を次のように語っている。

小言が来んように，きちっと作らにゃいけんと思って。あまり難しいこと考えんと，ともかく綺麗に仕上げることだね。まあ，注文してくれた人に，気に入ってもらえるように作らにゃいかんなーっとは思って作っとる。変なもん作ると，また買ってもらえんように成っちゃうといかんで。その程度しか思ってへんけど。(第12図及び第13図参照)

このように福井製陶では出荷上は白地のプレス物が6割を占めており，それをもってプレスの白地屋であると言えなくもないが，残りの4割が手造りの黒地を生産しており，しかも

第12図
福井謙一（鬼瓦製作中）

第13図
大黒天（福井製陶所入口、福井謙一作）

それを担当する職人が社長である福井謙一本人であり，もう一人の職人も娘婿の春日英紀で，黒の鬼板屋として手造りの伝統という縦糸を次の世代へと渡し終えている。白地のプレスとのバランスをうまくとりながら経営している仕事場が印象に残っている。

鬼良

長坂末吉系の第2社目が鬼良である。鬼良は系図的に少し複雑になっている。現在は鬼良という一つの鬼屋なのであるが，実際は今は存在しない「鬼八」という鬼屋と「鬼良」との合体したものが鬼良である。初代を誰にするかで見方は変わってくるが，まず石川八郎（明治33年生まれ）が小学卒業して12，3歳の頃長坂末吉の鬼末へ小僧として入り，職人となり，やがて大正11年に独立し鬼八を創業する。（第14図及び第15図参照）

第14図
石川八郎

第15図
影盛（石川八郎作）

その鬼八へ弟の石川良雄が入り鬼を習う。ところが兄の八郎が亡くなり，当時中学生の八郎の息子時春は弟の良雄に育てられ中学を卒業するのである。時春は卒業と同時に14歳で良雄の経営する鬼良[6]へ入った。さらに良雄の息子の現社長である石川幸夫が何と職人である鬼良の時春から直接鬼の技術を学んだのであった。それ故に石川良雄を鬼良の初代とすると石川幸夫は二代目という事になるが，実際の伝統上の流れを見ると石川八郎を初代に立てれば四代目といっても良いかとも思われる。石川家の内部の事情で本来は鬼屋が鬼八と鬼良の二つになるべきところが，キメラのように「鬼八」と「鬼良」が合体して表向きは鬼良となっているのである。元祖の長坂末吉の流れを直に伝えている鬼屋である。(第16図及び第17図参照)

第16図
石川良雄

第17図
吹き流し（石川良雄作）

伝統の継承上おもしろいと思われるのは，石川幸夫はまだ父親の良雄が健在であったにもかかわらず，従兄弟に当たる職人の石川時春から鬼板の技術を学んでいる点である。幸夫は次のように言っている。「親父が教えてくれなかった。まあ，年が開いていたから，やっぱり教えにくいんじゃないですか。自分の息子っていうのは。」実はこれと似たようなことを同じ山本吉兵衛の系列で，石川福太郎派に属している神谷伸達も述べている。事実，伸達は父親である仲次郎からは習わずに当時神仲にいた職人の杉浦民一から伝統を引き継いでいる。偶然かもしれないが興味あるパターンだと思う。そして少し形は違うが福井製陶の福井謙一も父親の眞二からは直接には習っていない。謙一の師匠は福光に職人として働いていた石川類似であった。

ところが伝統の継承は少なくともう一つ形態があり，それは直接的な技能の修得には関わらないが，伝統が息づく環境の中で幼い頃から生活する日々の体験を通して伝わっていく何かである。石川幸夫はその辺の事情を小学校の思い出として語っている。

> （宿題は）全然やって行かなかった。親も勉強しろじゃなく，うちの仕事を手伝いなさいということを言っていたので，もう，それをいかにうまく逃げていくかっていう。鬼瓦業を手伝うのか，または畑に行って野菜とか，今で言う瓜とか，西瓜とかいろんなもん作っとったんです。両方やっていましたから。それで草を取りに行くとか，夏休みは草取り，冬は麦踏みとか。とんとんと，足であれをやりに行くんですよ。夏休みは長いですから，泳ぎに行くなら，海泳ぎ行くなら，うちで埃を払い，煤を払いなさいって。黒く，焼けると黒い煤が出るんですよ。ガスで分解しますから。それを払えとか，いろいろ手伝うことをやらされました。

このように鬼良は鬼板屋であり同時に畑を5，6反所有する鬼屋主，農業従の形態を取っていた。ただ1990年代の初めに土地を埋め立て借地にしたという。つまり小さな子供の頃から高校生の頃まで，実際家で働きながら学校へ通っている状態だったのである。

> 昔はやることが一杯在ったんですよ。達磨窯で，今みたいに，こういった四角い，……燃料がガスでしょう。昔は薪とか，石炭を使いましたので，そうすると，結局，窯の中からそれを一応出しますね，燃え滓を。それを選り分けるんですよ。使えるものをもう一遍使うと。要するに炭ができるんですよ。炭と，全く石炭で完全に燃え切ったものと分類して分ける作業が在るんです。それで，もう一回それを使うんです。

この事に関して石川幸夫はガス窯に変わる以前の風変わりなこの土地特有の風物誌を語ってくれた。伝統的な産業がいかに土地の生活と一体化しているかがわかる。

まあ，瓦屋さんなんかは炭を売ったりとか，「瓦炭」なんていって，今で言うと備長炭みたいなのがありますよね。あれはなかなか火がつき難いんですけど，瓦炭っていうのはすぐ火がつくんです。で，昔は瓦屋さん，このあたり全部在ったですから，それで，結構，瓦屋さんは売ってみえた。

ところが鬼屋の方はこのいわば廃物である炭のリサイクルを鬼屋の中で完結していたのである。

でも鬼屋の場合，それを再利用して窯の中で，「あぶり」っていうんですかね。瓦の場合はたとえばこんなに薄いですから，鬼は，こんなに厚いですから，火を付けてからある程度50度，60度を最初長く，ずーっと置くんですよ。そのために昔炭を使ったみたいですね。その様なことを，結構，私たち，小さい頃にやらされました。

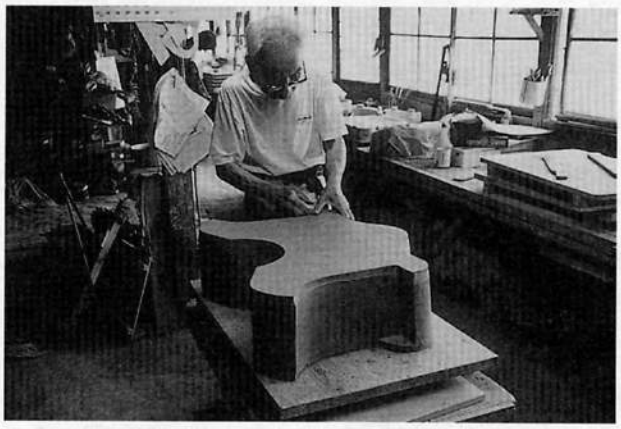
さてこのように独特の生活環境に育っていった石川幸夫であるが，一時期鬼から離れる。18歳から33歳まで自動車の整備士として働き，車の整備工場を将来営む計画でいた。ところが33歳の時，父親の良雄から家業を継ぐことを頼まれ，それを受けたのであった。その事を次のように語っている。「車のメカニックやっとったのが，鬼瓦，今やっとるんですよ。苦しいですよ，なかなか。ハンディ背負ってますから。中学校からとか，高校からいきなりここに入っとれば良かったんですけれど，そういう事じゃないですから。まあ，いまだに半端なんですわ。」そしてそのハンディに対する覚悟を同時に話し，手造りへの情熱を示す語りが続く。

俺なりに苦しんで来ましたよ。だから，人が3日でできるところを10日掛かってやれば良いんだから。10日掛かっても出来や出来。出来ん奴はいつまで経っても出来んからね。だから僕の場合は，まあ，人が3日なら10日掛けてもやりゃいいかと。死ぬまで勉強だと思って。今はそう思っているけど。

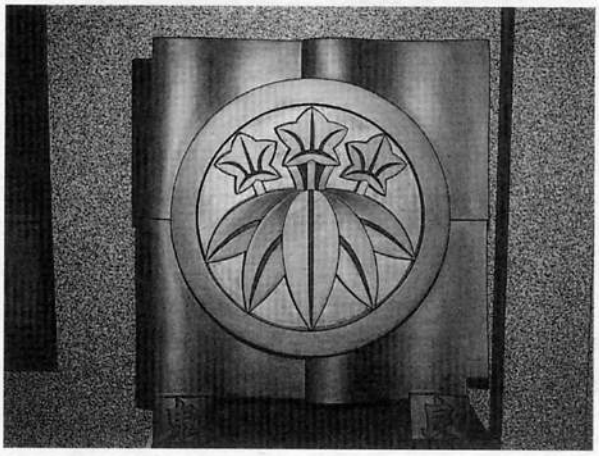
確かに33歳という歳は鬼師の世界では想像以上のハンディだと思われるが，幸夫の場合は常に師匠である従兄弟の石川時春が側におり，手造り鬼への道を共に歩んでいるのが特徴である。(第18図及び第19図参照)

幸夫は技術の習得に関しては次のように話してくれた。

いつも言われているんだけど，結局数作らにゃ駄目だって事です。あのー，難しいからやっぱりどっちかっていえば人間逃げたい。難しいもんとか，こう大きいもんとか，こ



第18図
石川時春（鬼瓦製作中）



第19図
家紋笹竜胆飾瓦（石川時春作）

う嫌がるもんは逃げたいと。でも，そういうもんに向かっていく，それも嫌がるものも作っていくことによってそれを，幾つか一晩に1個，2個，10個やるなら，100個作った方が上手いだろうし，多分。やっぱり下手は下手なりに数を扱うことによって上手くなる。下手ながらでも作っていくことによって。

純粋の職人であれば問題はなく，確かにこの通りにやって努力すれば上達して行くであろう。しかし，幸夫は鬼良の親方である。ここに幸夫を含めいわゆる「親方」の難しさが潜んで来る。親方は仕事柄，職人のように一日中同じ仕事に集中できない。おそらく職人や従業員を十分に抱えているところは親方と職人たちとの仕事の分離が起こってくると思われるが，鬼良は幸夫と時春そして幸夫の姉の3人で仕事を主にしており，親方の幸夫は独特な状況に置かれている。（第20図参照）それが「営業」，「配達」，「作る」といった三位一体の体制である。作るという時間がどうしても削られてしまうのである。

第20図
石川幸夫と鬼瓦（石川幸夫作）

この問題に関連して，昔と今の違いについて幸夫は次のように言っている。

> 昔なんか，配達っていうのが無くて，「庭渡し」というのが結構多かったんです。取りに来てくれていくらと。でも，今，県外持ってって，とか，鬼を配達する時代になったですわ。道路が良くなって。だから，ある人は大阪だろうが，京都だろうが，奈良だろうが，みんな持ってきますよね。現地へ。もうひどいと，屋根屋さんの本宅じゃ，倉庫じゃなくて，現地の現場をしますもんね。親方がそういう作業までしていると，例えば今日京都だとか奈良へ朝行けばもう一日終わりですよね。鬼を積んで，そういう事やってますので，もう大体仕事が出来なくなったくらいです。毎日出とるわけです。その合間を見てやっとるっていうのが現実ですから。

この現状は別の視点から見ると，鬼屋と瓦屋がそれぞれ独立分離していることを示している。屋根は鬼瓦と一般の瓦のセットで葺かれるので運搬もセットで出せばかなり問題が解消されると思われるが，その事について聞いてみると。「積んだ瓦と一緒に行けば良いわけでしょう。瓦屋と一緒に行く場合はもちろん有るだろうけど，鬼は鬼屋，鬼だけで行くっていう，県外走っとる車が多いです。」ここに三州の鬼板屋は日本でも独特な状況に置かれていることがわかる。逆に他県では鬼屋はその独立性を失い瓦屋の傘下に入ってその従業員になっているところが多いという。鬼屋の独立を維持するために三州の，特に黒の伝統的な手造りの鬼

板屋は経営者としての親方と，職人としての親方の狭間に立たされていると言えよう。鬼良の経営の特徴は手造りへのこだわりなのかもしれない。鬼屋としての鬼良は製造を手造り一本に絞っている。プレス生産を一切しない。しかし多様な注文に応じるために他社にプレスの半製品つまり白地を発注し，自社で焼いて出荷している。その比率が現在のところ，手造りの自社製品が4割，他社製品が6割といった情況である。そういった鬼良の性格を次の言葉が良く表している。

仕事全体が特に減っていますから，営業もやるときはあります。でも，作らにゃいかんわ。営業専門じゃないですから。大概は土に向かっている。暇があればね。

鬼末

長坂末吉の興した鬼末を継ぐ二代目に当たる石川要を親方とする鬼板屋である。長坂末吉の文字通りの直系に当たる。ところがいろいろと内部は複雑であった。石川要の鬼末はインタビューした当時（平成12年2月15日）白地屋として三州鬼瓦白地製造組合には入っていたが，現在はどこの組合にも入っていない。実際に工場に行った時は窯があるにもかかわらず黒地の組合には入っていなかった。表向きは白地の鬼屋であるが同時に黒地もやっているところであった。広い工場ではあるが，当時訪れた際に気が付いたのはかなり内部が荒れている様子であった。その広い工場の中で石川要に会い，いろいろと話を聞いたわけである。現在は鬼末は事業の失敗と病気のため，解体され，鬼屋としての鬼末自体が無くなっている。ちょうど一つの鬼屋が無くならんとする間際に立ち会ったのであった。

長坂末吉と石川要がなぜ同じ鬼末なのかが物語の始まりである。実は長坂末吉の一人娘が石川家に嫁いだのが事の起こりであった。そして8人の兄弟の子供が産まれたわけである。石川要はその中の長男であった。長坂末吉にも4人息子がいたのだが，不幸にも皆亡くなってしまい，一人娘である石川要の母親のみが残ったのであった。そういった事情であったが，石川要は養子として長坂家に入らず，職人として鬼末に入り，結果，鬼末の二代目になったのである。伝統の継承の難しさが現実に起こった一つの例だと言える。

石川要は中学校を卒業して豊田の工場へ1年ほど勤めたが，仕事が合わず，父親の家のすぐ近くにあった野々山という焜炉屋で働き始めている。14，5歳の頃，焜炉の世界に入り，それは同時に粘土の世界に入ったことを意味していた。母親が長坂の出なので当然小さい時から鬼末には出入りしていたわけである。実際に鬼末に意識して出入りし始めたのは焜炉屋で働き始めた頃からといい，18歳頃から徐々に鬼末へ移り始め，24歳の時に正式に鬼末で働き始めている。その時の心境をこう述べている。「自分にこの仕事が向くかどうかはその時は不安だったけどね。」

石川要が鬼末に入った時はすでに4，5人年配の職人がおり，その中に混じって働き始め

たのである。石川要が鬼末へ移った時，長坂末吉は70歳ぐらいだったという。そして2，3年して亡くなったのであった。長坂末吉が亡くなると，その当時鬼末にいた4，5人の職人さんが少しずつ独立し始めたという。そういった環境の中で石川要は鬼瓦の技術を習得していった。その石川要が一番影響を受けたという職人が福井眞二である。当時歳が25歳ぐらい離れており，福井から特に技術的なことを3，4年教わったという。

ここに実におもしろい伝統の系譜が見えてくる。福井眞二は福井製陶を興した福井謙一の父親であるが，福井謙一は福井眞二からは教わったことはなく，直接の師匠は福光という鬼板屋にいた職人の石川類次であった。ところが石川要は福井眞二から教わっている。つまり長坂末吉の伝統は福井眞二を通して鬼末の二代目である石川要に鬼末の仕事場で伝わったと言える。

福井眞二が鬼末を去った後は石川要は一人で技術を磨くことになる。石川要は次のように言っている。「やはり鬼というと自分でやってるだけでは駄目だもんね。人の仕事を見て盗むというか。だから口ではなかなか教えてくれないもんで。」つまり石川要は目標とするような鬼師が作った鬼瓦を見て，自分で研究をして自分の技術にしていったと言うことになる。普通は鬼瓦が研究材料なのであるが，ごく稀には，目標にしている人の仕事場へ行ったこともあるという。その時のことを少し語っているが，鬼板師同志の独特な攻防が伺えて興味深い。

> いや，行ったこともあります。でも，なかなか嫌がるもんね。それはね，へら動いとっても止めちゃうっていうかね。そういう人がおるもんね。人の仕事見て習うというのかな。

「見る」というと穏やかな表現だが，やはり「盗む」がより「見る」の意味としては近いかもしれない。そして次のように鬼板師の習性を語る。（第21図参照）

第21図
石川要と観音像（石川要作）

だもんで，鬼師というと外へ出ると上ばっか見て。屋根を見てるもんで。特に古いのが好きだったね。昔の人はどのように作っておったかっていうこと。やっぱり技術的には昔の人は優れておったね。

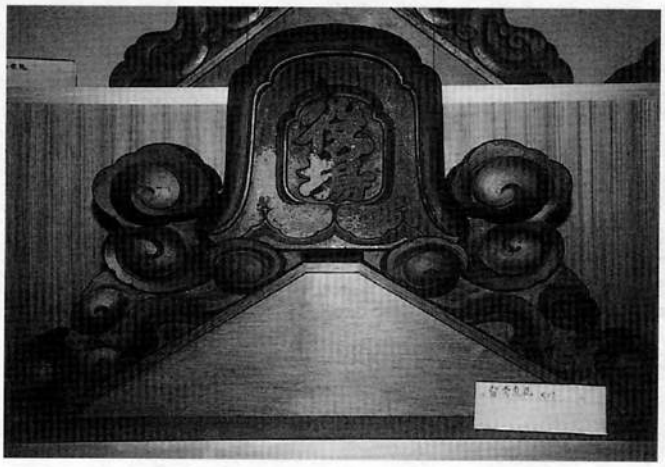
このように基本的には手造りを主体に来た鬼末であるが，昭和50年代になり，生活上，プレスを導入している。ただ鬼末の場合，プレスよりも手造りへの強いこだわりがはっきりしている。根っからの職人気質の人のように思えるのである。それ故に事業とのバランスが取り難かったのかもしれない。鬼面を手造りで製作するときの気持ちについて石川要は語っている。

現代風の鬼面というのは通用せんもんでね。昔の荒削りの，何というのかね，勢いのあるものをね。現代風は綺麗にやりすぎてるわね。荒っぽさがない。昔のものは屋根に上がって見るとその凄さがわかる。

先代の長坂末吉について訊ねてみた。確かに僅かな間の師弟関係ではあったが，石川要は先代を尊敬している様が伝わってくる。なぜなら石川要は私を高浜市郷土資料館に保存されてある長坂末吉の鬼瓦を見せにわざわざ連れていってくれたからである。感慨深げに先代の鬼を見つめていた石川要がとても印象に残っている。(第22図参照)

石川要はこう先代について言っていた。「まあ，先代の方が凄いと思うな。やっぱり感覚的にもレベルが上だと思うな。だで，昔の人は創造力があったと思うね。」

山本吉兵衛の職人の一人，長坂末吉から派生した鬼板師の一群について見てきた。鬼瓦の



第22図
旧高浜役場の鬼瓦(長坂末吉作)

伝統は実際に長坂末吉のもとで働いていた職人を通して現在の各鬼屋へ伝わっていることがわかる。ただ職人から職人へと伝わる技術の流れを追っていくと，現在，鬼末，鬼良，福井製陶の3軒が長坂末吉の系統として残っているが，福井製陶は初代の福井眞二と二代目福井謙一との間に技術の伝統上での断絶があり，長坂末吉系と共に山本成市の系統を持つ山本福光の流れを多分に取り込んだ鬼板屋になっている。またなぜ長坂末吉の鬼末で職人であった福井眞二が，山本福光の経営する鬼瓦屋で働き始めたのかもここに於いて推測可能になる。長坂末吉が72，3歳で亡くなったからである。福井眞二は暫く鬼末で働いていたが3，4年後に福光へ職人として移ったのである。そしてその福井眞二が福光へ移る前までの期間に，長坂末吉の伝統は当時まだ若い職人であった二代目鬼末になる石川要に伝えられていたのである。

注

1）「黒地の世界」と銘打ってはいるが，文字通りの黒地の世界ではなく，黒地の組合である三州鬼瓦製造組合に属している鬼板屋の世界の意味であり，黒地の意味が多様に変化しているのが現状である。
2）「鬼師の世界—三州鬼瓦の伝統と変遷」の中で議論した考えで，愛知県の矢作川を中心とする三河地区一帯に良質の粘土が存在し，昔からその天然資源を利用して独特な粘土文化が栄えて来たことを指す。
3）大半の住宅産業，例えば積水ハウスなどを指し，従来のセメント瓦やカラーベストから瓦の本物志向に転換し，粘土瓦で平たい今風な屋根瓦を使っている企業をこのように呼んでいる。
4）系図的な事であるが，山本福光は現在の山本鬼瓦工業（株）社長の父親に当たる山本成市の経営する「成市」という鬼板屋の職人であり，また山本成市の実弟でもあった。
5）小僧から職人になるという意味である。
6）石川良雄は戦時中，仕事が無くなったので，豊田工機に勤めていたが，終戦後昭和22年，「鬼良」として鬼を作り始めた。

参考文献

石田高子　1983『甍のうた』愛知県陶器瓦工業組合
駒井鋼之助　1963『粘土瓦読本』彰国社
三州鬼瓦製造組合・三州鬼瓦白地製造組合　2000『三州鬼瓦総合カタログ2000年度版』三州鬼瓦製造組合・三州鬼瓦白地製造組合
吹田市立博物館　1997『達磨窯』吹田市立博物館
杉浦茂春編　1982『高浜市誌資料(六)』高浜市
高原隆　2002「鬼師の世界—三州鬼瓦の伝統と変遷」『文明21』第9号．227～247
山下晋司，船曳健夫編　1997『文化人類学キーワード』有斐閣
ONIX　1992『鬼瓦総合カタログ』ONIX